

幅広い年代の住民を地域の担い手に ~いつの間にかいろんな人たちを巻き込む事業づくり~

担当: 山形大学地域教育文化学部

教授 安藤耕己

andok@e.yamagata-u.ac.jp

本日の内容

- はじめに
- グループ・サークルなどの継続性をめぐって
 - 1970年代の地域青年団の事例から
 - 集団凝集性の高まりの功罪
 - 支援における伴走性
 - 行政主導の支援／山形県南陽市の青年教育事業
- 「私事性」から「公共性」へ
 - 山形県長井市「ぼくらの文楽」
 - 大崎市西古川地区公民館: 公民館プラモ展示会
- まとめ

0. 自己紹介(履歴)

- 1972年、岩手県花巻市生まれ
- 筑波大学、筑波大学大学院博士課程で民俗学を学ぶ。(1991年4月～1998年3月)
- 岩手県立盛岡商業高等学校教諭
(地理歴史科担当)(1998年3月～2001年3月)
- 筑波大学大学院博士課程で教育学を学ぶ。社会教育学を専攻。(2001年4月～2004年3月)
- 筑波大学準研究員、助手を経て、2005年4月より吉備国際大学社会学部講師、2009年4月より同学部准教授。2010年8月より山形大学地域教育文化学部准教授。2019年10月より同教授。
- 博士(教育学)(筑波大学) 2019年3月

自己紹介(今研究していること)

- 戦後青年団の教育的意義に関する実証的研究(主要フィールド:岩手県)
- 社会教育行政・社会体育行政とNPOとの協働に関する研究
- 在学青少年および地方青年層の居場所・たまり場作りの意義に関する研究
- 戦後農村における農業改良普及事業と社会教育・公民館との協働に関する研究
- 近現代製糸工場における若年女性労働者に対する教育支援に関する実態調査(長野県諏訪地域・京都府綾部市・山形県長井市)

1. はじめに

■教室・講座・イベントなどの企画に際して

- ・マンネリ化
- ・参加者の減少
- ・予算削減も相まって整理・廃止が進む

■ニーズに応えることが第1か

- ・要求課題／必要課題 のバランス
- ・ニーズをどうくみ取るか ex.きらりよしまネットワーク

■「まきこむ」こと

- ・とっかかりをどうするか 私事性から公共性へ

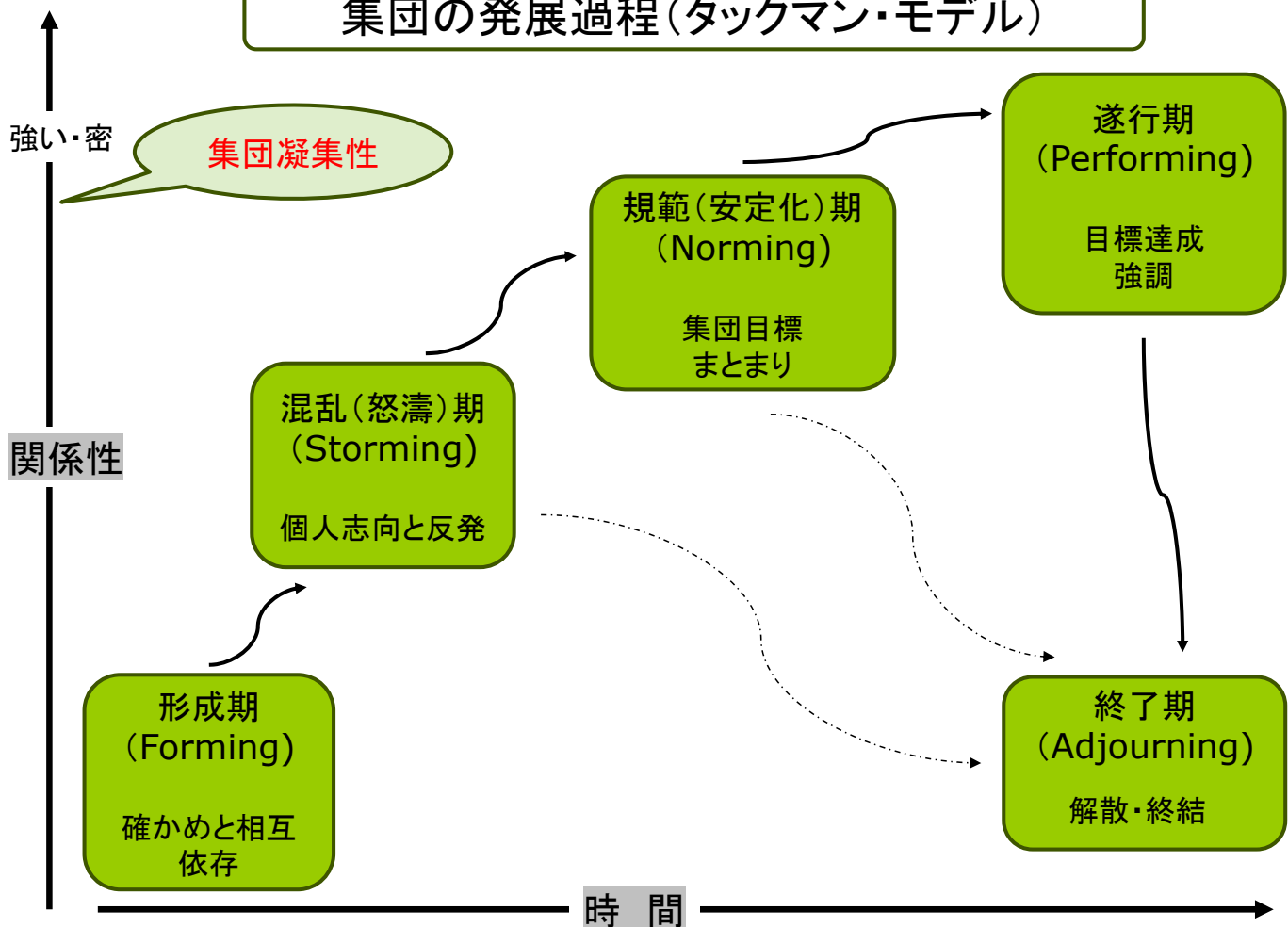
2. グループ・サークルの継続性をめぐって(1) 1970年代の地域青年団の事例から

■岩手県旧三陸町(現:大船渡市)浦浜青年会の事例

- ・「浦浜青年団」が1964年に「浦浜青年会」に改組。教育委員会主導で青年層の綱紀粛正を目論む。
- ・1972年、「うたごえサークル」系のメンバーが浦浜念仏剣舞復活に賛同して入会。以後、活性化。全国青年大会郷土芸能の部(1961～)出場を目指す。メンバーは高卒の在村通勤青年層がほとんど。
- ・練習・活動拠点を求めて1972年12月～1973年3月の夜と土日の作業で「浦浜青年会館」を自主建設。全国各地の青年会館建設運動、1983年の日本青年館建替運動のモデルとされた。「たまり場づくり」の先駆的事例。



集団の発展過程 (タックマン・モデル)



参考: 本間、2011、pp.28-32、猪俣・李、2023、pp.29-31

2. グループ・サークルの継続性をめぐって(2)

集団凝集性の高まりの功罪(本間、2011、pp.37-38)

■ポジティブな面

- ・メンバーが集団に惹きつけられているため、メンバーを集団に引き留める。集団の安定化へ。「ハマっていく」
- ・集団内メンバー相互の受容により、緊張・不安が軽減。友好が深まる。安心できる「居場所」へ。

■ネガティブな面

- ・新規参入者の受容は低下して閉鎖的なものへ。
 - ・当然、新規参入者は「入りづらい」「ハマらない」
- ⇒ 結果、組織および組織活動は先細る。

※スクラップアンドビルド／全面的な見直しができるか

2. グループ・サークルの継続性をめぐって(3)

支援における伴走性

■「教室・講座からサークルへ」

- ・1970年代頃から言われる、行政社会教育、公民館職員への対応のありよう・理想像

→ きっかけをつくり、次第に自立させていく。

伴走的な支援

- 「**自己教育**」支援を前提とする戦後社会教育、社会教育法の理念と通底。

cf. 社会教育法1～3条 <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC000000207>

社会教育法解説初版(1947)

寺中作雄著『社会教育法解説』

(社会教育図書株式会社、1949)

...社会教育は本来国民の自己教育であり、相互教育であって、国家が指揮し統制して、国家の力で推進せらるべき性質のものではない。国家の任務は国民の自由な社会教育活動に対する側面からの援助であり、奨励であり、且奉仕であるべきであって、例えば社会教育関係の団体を統制し、指揮したりするようなことは慎まなければならない(pp.9-10)。

→ 戦後社会教育法的前提

社会教育行政の役割は「**自己教育**」の支援

2. グループ・サークルの継続性をめぐって(4)

—行政主導の支援／山形県南陽市の青年教育事業—

■南陽市の概況(次スライド参照)

■「夢はぐくむ故郷(まち)南陽コンペティション」(2008)

・2008年7月から開始。当時の市長による「青年団の復活」を命題に予算化

・「百万円の賞金をニンジンに」「コンペでプレゼンできるまで」研修とワークショップの繰り返し。

・廣瀬隆人氏(当時:宇都宮大学)を講師&ブレインに。

・コンペは3回開催。以後、コンペのグループをもとにサークル化・自立化



南陽市の概況※

- ・人口:29,158人(9月1日現在)
- ・温泉と観光で栄えた旧赤湯町と製糸・農業で栄えた旧宮内村が戦後に合併。
- ・市内に8小学校、3中学校、県立高校1校
- ・公民館8館(ほぼ小学校区と一致)

※南陽市ホームページ

<http://www.city.nanyo.yamagata.jp>
(最終閲覧2024年9月7日)

左図出典:山形県内市町村ページ

<https://www.pref.yamagata.jp/020026/kensei/info/rmation/clink.html>

南陽市市制施行50周年記念事業

君のアイデア&アクションで南陽市をおもしろく変えていこう!

求めさせ!!

100万円

南陽若者コンペティション

ワークショップ
2017.6.17(土)~

市民公開コンペティション
2018.2.25(日)

参加対象者
市内在住・在勤・出身の原則20歳~34歳
コンペティションへの参加ルール
ガイダンスとワークショップに参加していただきます。

【ワークショップ】
①2017.6.17(土) ②7/8(土) ③7/30(日)
④8/19(土)20(日) ⑤夏合宿 ⑥2018.1/20(土)
⑦2/17(土)

【市民公開コンペティション】
2018.2/25(日)

応募方法
応募事項を下記の方法にてお申し込みください。
[お申込フォーム] e-mailコードより
①住所 ②氏名 ③年齢
④電話番号 ⑤メールアドレス
【電話】TEL.0238-40-3211(内線)548
⑥E-mail: syakyo1@city.nanyo.yamagata.jp

申込み締め切り 平成29年6月16日(金)

申込・問合せ
南陽市青年教育推進事業実行委員会
(南陽市教育委員会 社会教育課)
TEL.0238-40-3211(内線)548
E-mail: syakyo1@city.nanyo.yamagata.jp

チェックは1つで十分。
いざ、大賞賞金
100万円へ!

Q.南陽若者コンペティションって何をするの?
A.南陽市が元気になるまちづくりアイデアを競うコンペティションです。コンペティションに参加するには全日程のまちづくりワークショップへの参加が必要です。

Q.コンペティションへは必ずグループ参加したいとダメですか?
A.個人でもグループでも参加が可能です。ただしコンペティションへは必ずグループとしての企画を提案していただきますので、個人参加の場合は、事前ワークショップまで新しいグループを作るか、他のグループへ参加していただきます。

青年コンペ再開 (2017~2018)

なぜか?

cf. 浦浜青年会

南陽市青年教育事業：その後

■2017年、市制施行50周年記念事業「めざせ100万円！南陽若者コンペティション」を実施。

■複数のサークル活動・プロジェクトが開始。

■2021年、南陽青年団結成。

※同じ社会教育主事が6～8年継続して勤務

3. 「私事性」から「公共性」へ(1) —山形県長井市「ぼくらの文楽」—

■ぼくらの文楽(2011～2021)

・長井市西根地区公民館(現:コミュニティセンター)を拠点に開催される地域イベント。

・元ミュージシャンで現在は写真家をベースとした活動をする、地元在住の船山裕紀氏が中心となり開催。知名度が高いミュージシャンも毎年参加。

※2022年度より「みんなの文楽」に名称変更



長井市の概況※

- ・人口:24,551人(7月末現在)
- ・最上川舟運で栄える。戦前以来、工業都市の色合いを持つ。
- ・市内に6小学校、2中学校、県立高校2校
- ・コミュニティセンター5館
(ほぼ小学校区と一致、指定管理者制度導入)

※長井市ホームページ
<https://www.city.nagai.yamagata.jp>参照
 (最終閲覧2024年9月7日)

左図出典:山形県内市町村ページ
<https://www.pref.yamagata.jp/020026/kensei/information/clink.html>

3. 「私事性」から「公共性」へ(1) —山形県長井市「ぼくらの文楽」—

■2012年12月

パネルディスカッション「青年による地域作りを考える」

(於:山形県青年の家)

- ・同年の山形若者大賞受賞者5名が登壇。安藤がコーディネーター。
- ・船山氏も登壇。
- ・「どうしてこのような活動をしているのか」という問いに「自分と家族のため」と発言。

→「私事性」から「公共性」というスタンスに大いに共感

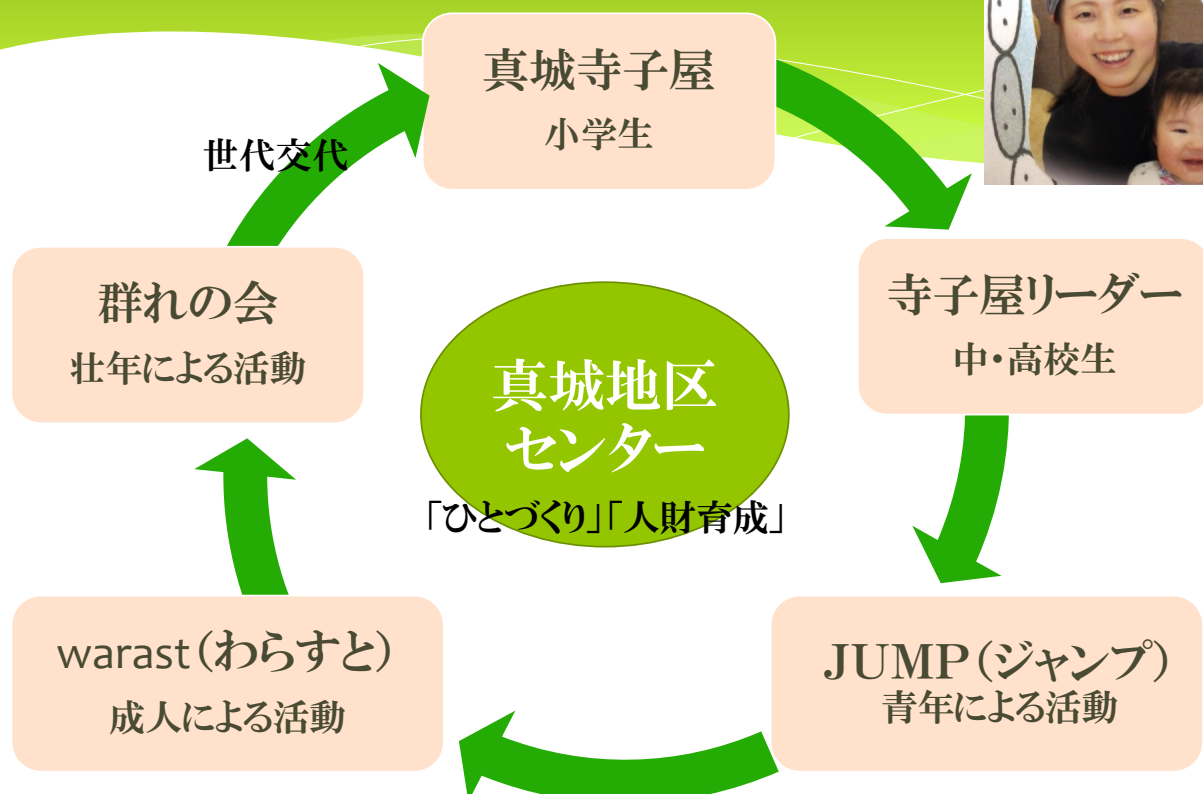
3. 「私事性」から「公共性」へ(2)

大崎市西古川地区公民館：公民館プラモ展示会

- ・「元気祭り」にて、館長の趣味である模型を展示したことがスタート。
- ・今では西古川地区公民館での定例イベントへ。
- ・「親世代」を「地域づくり」の輪に入れるしかけ

→ 「楽しさ」が次第に公共性を帯びていく

「ひとづくり」の拠点



4. まとめ

■グループ・サークルや教室・講座も「続かない」

- ・初期メンバーの引退や引退制原理がある青少年対象の事業ではままたる。
- ・スクラップ&ビルドあるいは大幅な見直し
- ・しかし、これらに「伴走」できるか。

■「私事性」から「公共性」へ

- ・「世のため」「人のため」「地域のため」から始まると重い。
- ・「自分のため」が「自分たちのため」、ひいては「地域のため」と展開するベクトルで。

参考文献

- ・安藤耕己「若者の「たまり場」づくりにみる地域集会施設のあり方ー岩手県旧三陸町浦浜青年会館の事例を中心にー」、『日本公民館学会年報』創刊号、2004
- ・安藤耕己「若者にとってのたまり場・居場所」、手打明敏・上田孝典編著『〈つながり〉の社会教育・生涯学習ー持続可能な社会を支える学びー』東洋館出版社、2017
- ・狩俣正雄・李超『チームビルディング』中央経済社、2023
- ・本間道子『集団行動の心理学』サイエンス社、2011

ワールドカフェ(「自家受粉型」ワークショップ) の進め方(1)

① 「ホスト」を決める

ホストはそのテーブルの進行役 & 説明役(宿り木)になる。

② 自己紹介(アイスブレイク)

氏名、所属先、簡単な自己紹介を。

③ 課題の提示

今回お持ちいただいた「みなさんが悩んでいること、自慢できること、新しくチャレンジしてみようと考えていること」をみんなに伝えてください(資料や動画などで)。

ここまで30分～40分を目安とする

ワールドカフェ(「自家受粉型」ワークショップ) の進め方(2)

④ 移動

ホストを残して別のテーブルに移動する。ここで簡単に自己紹介後、ホストが、先ほどまでの議論を説明。移動してきたメンバーはそれにコメントや付け加えをしながら、課題の共有と解決の方策を提起し合う。また模造紙に書き込んでもよい。

20分～30分を目安に移動し、最終的にもとのテーブルに戻る(時間は指示)

⑤ 課題の整理と改善案の提起

ホストがテーブルでどのような議論があったかを説明。それに他のテーブルでの議論を加え、共有した課題の確認とその解決の方策を検討する。